

親
孝
長
月
孝
月

しんこうまろ

木村繁

しんとくまるは、なみのはなる浪花の国、現在の大阪を舞台としています。中でも四天王寺は推古元年、西暦五百九十三年、聖徳太子が建立したお寺で、その西門は観音菩薩の住む極楽浄土への入り口といわれてきました。

国宝『一遍上人絵傳』によれば、西門の片隅には乞食たちの小屋がいくつも建ち、顔や手足を白布で包んだ病に苦しむ人々や、盲目杖をついた目の見えぬ人々が、観音菩薩に会えるのを今か今かと待ち焦がれる様が描かれています。

(以上現代語り)

「その日は秋の彼岸も近づきて、げに時ものどかなる、目を得てあまねき、貴賤の庭に、今は夕日の、落ちかかるらん。かかる彼岸の折も折、手には盲人杖、頭には白布、手足は膿血にまみれたる、まだ幼き病者が、一目散に駆け込みぬ。めしを盗みて侍所に追われしか、出奔して男衆に追われしか、石に躓き、参詣人に突き当たり、ころびまるびつ、倒れける名はしんとくまるなり。」

しんとくまるは声も涙にわなわなど、「某は目の見えぬ病者なり。哀れな乞食に小屋を建てさせてくださいと、涙ながらのせぐるし声。乞食たちがそれを聞き「なんだなんだ、乞食小屋を建てたいだ」と。この境内ではな、かまぼこ小屋は、わしら天王寺もんの特権じゃ。他所人が小屋を立てたいなら、銭を払え。とあからさまなるねだり声。しんとくまるはたかられて、家に伝わる金の香炉を手渡せば、乞食たちは目もくらみ、「チオ、嬉しやありがたやと、返礼に、拾い集めた古柱や板っ切れ、九日分の水と干飯を指し出す。しんとくまるは、境内に古柱をおっ立てて、板っ切れで壁を貼り、屋根には小石を並べられ、乞食小屋を建てられて、見えぬ眼で、今来た方を伺えど、追いつける者の影はなし。聞こゆるは、天王寺ヶ浜に打ち寄せる波音ばかり。「われ弓取の家に生まれ、あのような恥をかくのはやるせなや、あ、めんぼくなし、恥ずかしし、こは情けなの次第かな。と小屋の内へと隠れ入り、かんぬきかつしと固めける。」

「日は落ちて、おりしも聞こゆる、暮れ六つの鐘。かまぼこ小屋の内陣は、漆黒闇に包まれて、しんとくまるは、狭苦しき、床に這いつくばり、「光明遍照、十方世界、念仏衆生、攝取不捨、われ成仏して、西方浄土へ参らんと、

しきりに念仏唱えれど、唱える念仏、力なし。

所在なく、潰れたまなこで、壁の節穴覗き見れば、乞食どもが暖取りし、かすかな残り火に照らされて、へまわるまわる、しんどくまるの、影はくるくる回りだす。わずか十四で果てるとは、古来稀まれなり、あわれなり。ただ何事も、夢幻ゆめまぼろしや、水の泡。まわるまわる、影はくるくる回りだし、一期は夢よ、狂え、狂え、狂え、夢幻や、覗き機関のぞきからくり。

②

左手に盲目杖、右手に腕を携めてえて、しんどくまるが、街道一の長者の屋敷に佇みぬ。そは、二、三日前の事。

夢枕に、観音菩薩が現れて、「汝、熊野の湯へ浸かるならば、病本復間違ほんかくいなし」とお告げがありて、しんどくまるは、熊野目指して詣でしが、その道すがら、飢えと渴きに耐えかねて、堀の舟橋うち渡り、屋敷の庭先にツト立ちて、「お頼み申す。哀れな乞食に水と粥とお恵み下され。と袖乞したり。

それを聞いた女房が乞食を見回して、「のう、いかに朋輩衆、この物乞いはどこぞで逢うたはずじゃが、はて、何処で逢うたお方かの。と声かけると、七、八人の女房共が物見高にいで来たり。「あれはいにしえ、天王寺の石舞台で舞を舞うた稚児じゃ。「そんなら、うちの乙姫様と結納交わしたしんどくまるか。「よりによって、乙姫様の屋敷へ袖乞いに参るとは、しんどくまるも墮ちたものよ。「アレ、奥の間から乙姫様の声がする。「もしも乙姫様のお目に入ったら一大事じゃ「エエ、おどましや。この度の結納は、ええ、もつまい。としんどくまるを追い払い、その醜態を笑いける。しんどくまるは、胸に満ち来る疑念をば、打消し掻き消し、盲目杖にすがりつつ、「この上は天王寺に逃げ込んで、人知れず、飢え死にをせん。と和泉の里からひんもどり、天王寺めざしてよろほいぬ。

へまわるまわる、影はくるくる回りだし、一期は夢よ、狂え、狂え、狂え、夢幻や、覗き機関のぞきからくり。

③

へそのむかし、天王寺の、蓮池に、石の舞台をしつらえて、四方に花を生けられて、稚児の舞の御慰み。しんとくまるは美少年。扇の手はよし、舞姿申すに及ばず。かくして七日の舞が三日あり、四日の日のことなるに、しんとくまるは、扇の手の隙間より、戌亥の座敷におわします、和泉の国、陰山長者の御姫君、乙姫殿に目をとめぬ。

乙姫御年十三歳、花の顔せ、月の眉、今を盛りの藤額、紫ぼかしの振袖に、薄紅梅の打ち掛けまとい、池を隔てて、爪音高く、想夫恋を弾じける。

しんとくまるは一目御覧して、「まこと、浮世が思うようになるならば、あの姫君と一夜の最愛なすならば、思い残すこと、もはやなし。と文かわし合い、人もうらやむ、いいなづけにとなりにける。

へまわるまわる、影はくるくる回りだし、一期は夢よ、狂え、狂え、狂え、夢幻や、覗き機関。

④

それはさておき、しんとくまるの母君は、若君の結納を喜び、御一門に申さる。「思い起こせば、われら夫婦に子なき故に、観音菩薩にお詣りし、唐の鏡二十一面、金襴緞帳二十一流れを奉納し、ようよう、しんとくまるを授かりしが、その折に、しんとくまる三歳になるならば、父か母かな身代わりに、命の恐れのあるべきと、観音菩薩の仰せありしが、三歳五歳ははや過ぎて、はや十四歳になりぬれど、父にも母にも難はなし。観音菩薩は嘘をつかわせ給うなり。ほ、ほ、ほ、嘘をつかせ給うなり、あな、おかし。とおめず臆せず、お笑いある。

観音菩薩がそれを聞き、「信吉夫婦に子のないのを不憫と思えば、しんとくまるを、申し子として授けしが、その恩を忘れ、観音菩薩は嘘をついたと笑いける。御台所は信心あさし、憎しや憎し。へと遣いの御先を呼び出せば、御先はたちまち風に乗る、長者の屋敷へ飛び来たり、母の五体に憑りつき、命よ、離れて退けよと、責め立てれば、あれよあれよと母上は、顔の血の気も薄らいで、あしたの露とぞ消え給う。

へまわるまわる、影はくるくる回りだし、一期は夢よ、狂え、狂え、狂え、夢幻や、覗き機関。

⑤

日ならずして、妻に先立たれた新吉長者に、御台所なくてはかなうまいと、六条殿の姫君を後妻にと迎えける。六条殿の姫君は、玉のようなる五郎丸を産み落とせども、年の離れた信吉長者に恋慕を抱けず、三つ年下のしんとくまるに、心を寄せるも無理はなし。

さる夕暮れ、長者の留守を幸いに、「しんとくや、そのように書物の稽古にばかり凝ってては体の毒じゃ。今宵はお父上がお泊りじゃ、母の部屋へ来て、酒一つ食べ。」母上故、氣遣いは致しませぬが、もし人に見られたら言い訳がなりません。」「ほ、、、心配には及ばぬわいな。他人ではなし、母じゃもの。ササ、しんとくや、わらわの部屋へおじゃれおじゃれ。と、酒興に乗じて継母は、目の縁ほんのり赤らめて、しんとくまるの手を引きぬ。

しんとくまるは、いわれるままに、継母の部屋へ通られしが、「ササ、しんとくや、そなたの好きな酒肴、山海の珍味をそろえたぞえ。膝を崩して一つ飲みなア。」母上のお言葉では御座りますが、しんとくは幼年で、まだ酒は飲めませんから、御免をこうむります。「しんとくや、他人ではなし、母の盃じゃ、一つ遣ってみな。」さようなら母上様、せつかくです、お盃のみ頂戴いたし、お暇いたします。「アレアレ、そなたとわらわは三つしか違わぬに、しんとくまるは幼いねえ。そんなら酒はやめにして、わらわがそなたに願ひ事があるが、しんとくや、かなえておくれかい。」「はい、母上の仰せにかないます事ならなんなりと。」「母が願ひとはしんとくや、わたしゃ、そなたが欲しい。」「ええッ。」「戯れではないぞえ、義理の息子に恋をするとは恥ずかしい事なれど、母は真実そなたに惚れたぞえ。しんとくや、わらわと一緒にしておくれ。と怪しがる顔色で継母は、しんとくまるに詰め寄りぬ。しんとくまるは、ツト飛びのいて、「母上、御酒の戯れはたいに遊ばせ、今宵の一件が、父上のお耳を汚せば、お家の大事にかかります。左様ならば母上様、お暇賜ります。と、声も涙にかき曇り、別れてこそは出でていく。

継母は、しんとくまるを見送りて、「アレ、見さいのう、しんとくは、空ゆく雲の速さよ、ほ、ほ、ほ、。憎いふりかな、あのふりする人、一度いとすと云うたなら、よし浮名の立てば立て、この焔ほむら、なぜにやすやす、消さるるものか。かくして継母の恋の焔は、憎しみにと代わり、「そうじゃそうじゃ、しんとくまるは観音菩薩の申し子なれば、生かすも殺すも観音次第じゃ。観音菩薩の力を借りて、しんとくまるを禱いのり殺してしまおうと、遣いの御先を呼び出せば御先はたちまち風に乗り、なじみの鍛冶屋に、八寸釘の笠なし釘を百本打たせ、黒髪に蠟燭百本灯しつつ、観音堂へと急ぎ行き、百八つの金の皿、錦の反物七流れを奉納し、大桶くすのきに、しんとくまるの絵姿を、まっさかさまに貼り付けて、「南無や清滝きよたき観世音、しんとくまるを、今宵一夜に一命取りたまえ。命強くて取られずば、かならず両眼つぶしたまえと。へかっしかつと打つ釘は、頭すのてっぺんまで十四頸けい、あばら三枚残りなく、手足の節々打たれける。かっしかつと五臓六腑に打つ釘を、並べて立てたる有様は、身の毛もよだつばかりにて、継子のきもに通じてか、打ったる釘の元よりも、血潮はさつと走りける。

⑥

乞食小屋に引き籠りて九日目の夜、しんとくまるは夢を見る。観音菩薩が夢枕に立ち、「この乞食小屋は極楽浄土へ渡る渡海舟とかいふねなり。そなたは極楽浄土で生まれ変わり、未来永劫えいごう、余に仕えるのだ。聞いてしんとくまるは、乞食小屋に観音丸と帆をかかけ、発心門ほっしん、修行門、菩提門、涅槃門ねはんと、四つの鳥居を立て、光明遍照こうみょうへんじょう、十方世界じつぱうせかい、念仏衆生ねんぶつしゅうじょう、摂取不捨せつしゆふしゃと念仏を唱えける。唱えるほどに波は高まり、見送る舟は、海上三里の綱切島で綱を切つて戻りゆく。「おーい、おーい。と見送る声も波間に消えて、しんとくまるは浄土めざして流れゆく。

いかほど立ちしか、辿り着いた巖いわおの大地は、広々と限りなく静かなところで、永久とわに枯れぬ花々が咲き乱れ、光り輝く五色の鳥たちが舞い遊びけり。

見れば巖におわします観音菩薩の手の平に、先立ちし乳房の母が微笑みたり。隣には、しんとくまるに恋仕掛け、呪いをかけた継母が微笑みたり。二人の母は連れ添って、しんとくまるを、おいでおいでと手招きける。

しんとくまるはつのる思いを押しとどめ、「われ、十四にして、病者となり、両眼はつぶれ、熊野へ向かう、道すがら、乙姫様の屋敷に迷い込み、生涯忘れぬ恥をかき、天王寺に引き籠りにけり。あまりに酷いこの運命。世の中に、観音菩薩の救いの御手はありやしやと、へ身を恨みたる、むせび泣き。

しんとく、観音菩薩を睨み据え、病んだ手足を、むずと踏ん張り、小屋のかんぬきこじ開けて、目は見えねど、手でまさぐり、どつかと足を踏み出だす。思い込んだる無念の面差し、つぶれた両眼つりあがり、髪は逆立ち、血を吹きて、この世からなる悪霊の、相を頭わすばかりなり。

へ柱倒れ、板戸割れ、屋根に乗せたる、重しの石も飛び散りて、壊れる壊れる、小屋が壊れる、観音壊れる、世界が壊れる、夢か現か、覗き機関、くるくる回り、小屋が壊れる、観音壊れる、世界が壊れる、くるくるくるくる

(三味線独奏)

7 夢覚めれば、朝まだ早き天王寺の境内に、白い布で包まれた、しんとくまるが、石ッころのごとく転がるばかり。

へしんとくまるはかわいそう、継母様に禱られて、ふた親様があつたなら、こういう思いはしますまい

日はのぼり、参詣人や、念仏僧、琵琶法師などが往きかう境内に、背には笈摺、胸に木札、西国巡礼と姿を変えた乙姫が、しんとくまるを探して尋ね来る。乙姫は、口ずさみし数え歌を留められて、石の舞台上がりあり、「そのむかし、この石舞台で稚児の舞を舞われたる、しんとくまる様が恋しやな。夫の行方が尋ねたやと、詣でる人々に尋ねれど、その行き方はさらになし。

「もはや和泉の里へは戻るまじ。しんとくまる様に会うことなければ、この蓮池に身を投げて、来世はあの世でしんとくまる様と添い遂げんと、たもとに小石を拾い入れ、いぎ池水に身を投げんとなしたれど、「待てしばし、わが心、尋ね残したところありと、石舞台を後にして、西の門へと向かいける。

そのとき、西門で遊ぶ童らが、目の見えぬ、しんとくまるを見つけ出し、「おい、源ちゃん、あそこにいる弱法師を

ご覧よッ。「欽ちゃん、あの弱法師は目がつぶれているよ。「狂い舞いの弱法師よろほしやい。舞を舞ってみろ。舞ってみろ。とやいのやいのと囃しける。

しんどくまるは仕方なく、盲人杖を手に構え。へヤレ、おもしろや。エン、おもしろや、狂いつ舞いて、舞いつ狂いて、ちよろり、ちよろり、ちよろちよろ、ころり、河童の戯れざれえ絵の陸踊り。「おもしろやの弱法師に、御めぐみを願ひ候。それを見て、図に乗った童たちが、「おい、弱法師に草鞋を投げつけてやろうと、草履ばかりか小石まで投げつけるそれがしんどくまるの背中に当たり、手足を痛めつけ、しんどくまるは「痛い痛い、お願いです。どなた様でも、この弱法師を助けてくださいましてくださいまし。と悲鳴を上げて拜むばかり。

かかる騒ぎに驚いて、まろび出でたる乙姫が、それと見るより、気は狂乱、髻たがきをバサリと振りほどぎ、黒髪逆立て、大音声。「この、悪童めらがッ、この乞食こつじきはわらわの手下なるぞ。弱法師を虐めると、おまえ達も手下にして、乞食小屋へ攫さらっていくぞッ。と、へすばやく逃げるを、むんずと掴み、悪童たちをば引き回し、ドウツと落とすその響き、天王寺の釣鐘を切って落とすもかくならん。悪童めらは、てんでんばらばら、逃げにける。

へ思いつめたる娘氣の、真実見えて、いじらしや。乙姫は乞食の手を取りて、姿形をつくづくうち眺め、「不思議やなア、その昔、この天王寺で、稚児の舞を舞われたる、しんどくまる様によく似たおもかげ。わらわは乙姫にて御座あるに、どうかお名をお名乗りあれ。と、心に探りの一思案、まことしやかに相述べて、弱法師にい抱き着く。

弱法師はどっさのことに言葉を失い、「エエ、何をなさる、腹の立つ。何方様かは存ぜぬが、そのように目の見えぬ者をおからかいなされるな。そこ退きたまえ。と乙姫の手を払って逃げ出すが、乙姫は心ひとつに思案を極め、「アレ、なさけなの次第やな、乙姫でない者が、なぜに御身やまうしのような病者に抱きつこうぞ。どうか、どうか、お名乗りあれど、お問まいある。

へ差し伸べられた、やさしき御手は、観音菩薩の手にあらず。姿かたちは見えねども、指で触れ、手のひらでさわり、腕かいな、目、鼻、口元、まさぐるうちに、夢にまで見た人の面影結び、「スリヤ、そなたは乙姫様なるか、と声発せども、恥

みせじと、かぶり振り、「それにしても、こうして乙姫様にお会いしたことの恥ずかしさよ。後生ですから、乙姫様、この再会はお忘れになって、これよりも和泉の里へお帰りあれ。とお頼みある。「しんとくまる様、なんの恥ずかしいことがあるものか。たとえ一緒に袖乞いするとても、しんとくまる様のお供申さぬものなれば、何しにここまで参るべし。しんとくまる様の病は、しんからおこりし病でなし、人の呪いの病なり。そのような病は、昔から、三千人の人々に、この姿見せて施し受ければ、病は平癒へいゆすると聞きます。「なんと、三千人の人々に姿を見せるとな。「あい、二人一緒に、河内、和泉のここかしこ、袖乞いして歩きましょう。と乙姫は、歲月経ても、もとは許嫁け、問いつ問われつ、積もる言の葉くりかえし、嬉し涙の種ぞかし。

乙姫は、笈おしずる摺こしづきから小御器をとり出だし、「この小御器は米、お布施を貰うための器なり。と、いとし、可愛の面影を、越し方になぐり捨てて、互いに見交わす顔と顔。しんとくまるも「嗚呼、さっぱりと気が晴れました。乙姫様と会えて嬉しやな、どのたまえば、乙姫も「皆、こなさまの、愛しさゆえと、乙姫はしんとくまるの手をとりて、「いぎ、三千人の人々に、この姿を見せて施し受けんと、天王寺の境内を出でにける。

へしんとくまるは手を引かれ、天王寺ヶ原にいとまごい、山に寝よか、野に寝よか、おおかみ、獅子に、食われよか。へ観音さまにすがつても、なぜに病が治りようか、しんからおこりし病でなし、三千人の人々に、姿を見せれば、目はなおよる。

これにて、覗き機関しんとくまる、全編の読み切りでございませう。

浄瑠璃台本・演出：木村繁
美術監督：福永朝子
浄瑠璃節附：常磐津綱鵬

照明：御原祥子

衣装協力：木場絵理香

舞台監督：Chang

宣伝美術・宣伝動画：LONTO

制作：ラストライダーカンパニー(有)

Presented by：プッペンテロル

出演：常磐津綱鵬

LONTO

古家暖華

※上演許可はプッペンテロルへご連絡ください。

※実際の上演内容とは異なる箇所もございます。